

# 呼吸の歌

October 29, 2013 / text : 石井孝浩 (Fool's Mate)

音像は、さみしい。ひかえめを通り越して小さく響くクリーントーンのアルペジオとパーカッション、ささやくような歌。インストゥルメンタルの1曲をのぞいてどれも幽かなことを歌っている。しかしその幽かなことは、こうして歌われてしまうと他のどのようなドラスティックな事象よりも確かな存在感をあらわにする。気づかないでいたこと、形をもたぬはずのものが、強迫性やフェティシズムとは無縁に、ごくあたり前のように姿をみせる。たとえば冒頭の「夜のこの空と」では“朽ちて老いている” “今も凍っている” “欠けていくよ”と、こうして抜粋・並列してしまうとかなりネガティブな印象のリリックスだが、“陰の中にひかり綴じて”と唯一の明るみである“ひかり”が仄かな光明をさす。音声として“綴じて”は“閉じて”にどうしても聞こえてしまうが、聴きながら歌詞を追っていくと“綴じる”が静かに衝撃を孕んでくる。音韻数として“紡ぐ”でもよかったはずなのに“綴じる”としているのはどうしてだろう。それはおそらく“紡ぐ”にすると“ひかり”の形態が変わってしまうからだろう。ニュアンスとして、紡いでしまうとひかりは素材となって別のかたちをとることになる。綴じるとひかりはそのままそこに重ねられる。つまり“朽ちて老いて”も“ひかり”が残ることを暗示しているため、この歌の中ではストレートなネガティブさを感じさせない。おおよそほとんどの生きものは誕生と同時に死へ近づいていく。朽ちて老いることは“生”からみたならネガティブな宿命だが、ごくあたり前のプロセスでもある。しかし「夜のこの空と」は諦念の歌ではない。歌詞の字面だけを見ていくと、かなり文学性の濃厚な趣ではあるが、過剰な観念性やけれんとは離れた歌い方、まるで呼吸するかのごとき仕種で森川は言葉を放っている。

人は答えの出ない問いに対して諦めを好む。諦念、虚無。これらのタームは神の視点でもあることを思い出させる。完全であるはずの者がわずかな欠落から急転直下してしまうナルシズムの罠。そのようなものは時代的にギャグのように氾濫しているし、死に直結させる者もおびただしい。しかし森川はそうした劇的な起伏から遠ざかるように歌う。時代や場所、時と空間を超えて、肉眼では見ることのできないイメージとあからさまに定義付け不能な肉体と精神の関係を、小さな音を装いながら浮かび上がらせるのだ。しかしすべてを受け入れるには人間という在り方は脆弱で偏向的でもある。5曲目「何人半人」はタイトルからすでに“人間”ではない。生死を往還し、“言葉”と“想念”を往還する主人公は、もはや霊体と化したかのようにめくるめく世界で揺らいでいる。それでもこの音世界にはそこはかたない静謐は保たれている。最後の「空を瞬く」では肉体と精神は明らかに対立する。しかしその対立は根源的にさかしまである。それが如実なのは“去れよこの身よ”というリリックである。去れよこの身を、ではないところがきわめてサイケデリックだ。

呼吸のような歌はこの先呼吸のように消えてしまうかもしれない。しかしまだこの先が、森川には、血と栗にはあるはずだ。